

# 『ガリヴァ旅行記』におけるユートピア的要素

山内 暁彦

## On the Utopian Elements in *Gulliver's Travels*

Akihiko YAMAUCHI

### Abstract

The idea of utopia originally came from Thomas More's *Utopia*. Utopian literature is mainly concerned with social systems such as politics, laws, and customs. In an utopia, descriptions of imaginary remote regions in an ideally perfect condition can be found. The setting of Jonathan Swift's *Gulliver's Travels* is imaginary, distant countries. In addition, Swift makes ambiguous the distinction between the imaginary world and the real world. This is one of the attractive points of Swift's work. *Gulliver's Travels* is both a mock-traveller's tale and an imaginary voyage.

Presenting an ideal condition in this work was not Swift's intent. But there certainly exist some utopian elements in "the original Institution" of Lilliput. The description of Lilliputian social systems is related to utopian literature because it is written as if it were a treatise, not an ordinary narrative. Brobdingnag also can be regarded as an utopian country that consists with a very simple culture, in contrast to the abuse of the European civilization.

However, an utopia can easily turn into a dystopia. In other words, what is utopia to one reader can be seen as a dystopia to another. Any judgment whether a certain society depicted in utopian fiction is an utopia or a dystopia must be arbitrary. As an example, we can point out the matter of "freedom of speech" that is mentioned by the King of Brobdingnag. He does not allow his subjects to express their opinion without any restriction. Thus the country cannot be regarded as a pure utopia. Any interpretation of *Gulliver's Travels* is inevitably a complicated one since this book is a mock-utopia that parodies the whole idea of utopia and

mocks the utopian mentality.

Religious systems, including freedom of religion, are contemplated seriously in More's *Utopia*. On the other hand, "freedom of speech" is satirised in the "Voyage to Brobdingnag" and again in the "Voyage to the Country of the Houyhnhnms." Even the existence of opinion is unknown among the horses. It is not sufficient to consider Houyhnhnmland as a typical dystopia. The world described in the fourth voyage is so uncanny a world that it makes any discussion to decide whether it is an utopia or a dystopia almost meaningless. This notion is supported by the interpretation that Gulliver-as-narrator, who was instructed by the reason of the Houyhnhnms, is a madman at the end of his travels.

Although *Gulliver's Travels* has both utopian and dystopian elements, the book is neither a work of utopian nor of dystopian literature, but rather a parody of utopia and an extraordinary satire which represents Swift's unique view of the world.

## 序

『ガリヴァ旅行記』 *Gulliver's Travels* (以下 *GT* と略記) の本編に付け加えられている、「ガリヴァ船長から従兄シンプソンへの書簡」"A Letter from Capt. Gulliver to his Cousin Sympson"の中の、フィヌムとヤフーとをユートピアの住人と並列させた、ガリヴァの次の言葉は、単なる冗談として読者の印象に残るというだけのものではなく、この作品が、ある意味で、ユートピア文学の系譜に属するものであるということを、改めて読者に思い起こさせるものでもある。

If the Censure of *Yahoos* could any Way affect me, I should have great Reason to complain, that some of them are so bold as to think my Book of Travels a meer Fiction out of mine own Brain; and have gone so far as to drop Hints, that the *Houyhnhnms* and *Yahoos* have no more Existence than the Inhabitants of *Utopia*.<sup>1</sup>

---

1. Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, Vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis (Oxford: Basil Blackwell, 1939-68), pp.7-8.

GT は、様々な解釈が可能な怪物的な作品であり、様々な角度から論じることが出来るものであるが、本論では、〈ユートピア〉の基本的な意味を確認した上で、この作品における、ユートピア的、ないしは逆ユートピア的要素を指摘し、そのあり方、すなわち、内容的、形式的な特質を検討し、スウィフト Jonathan Swift の目的である、諷刺の遂行との関わりを考察する。彼が、独自の世界の創造に際し、ガリヴァの記述を通じての呈示という手法を取ることや、内容的に様々な要素を盛り込むことによって、一義的なくユートピア〉にも〈逆ユートピア〉にも見做せないような、錯綜した世界像の表現をしていることを明らかにしたい。本作品の特異性を再確認する為の一つの試みとして、GT におけるユートピアの要素について考察していくが、その際の具体的な対象として、我々は、主として、リリパット、ブロブディングナグ、フィヌム国、そしてモア Sir Thomas More のユートピア島の、広義の「制度」に関する事柄、とりわけ、言論の自由、信教の自由の問題を取り扱う。

## I

〈ユートピア〉という概念は、誰でもある一定のイメージを喚起されるような、ごく普通概念として受け入れられているために、その実体が改めて問題にされることの少ないものである。また、論者によって、その意味するところが微妙に異なるものである。我々は、始めにその基本的な意味を確認しておかねばならない。試みに *OED* の定義を参照してみよう。まず 1 として、“An imaginary island, depicted by Sir Thomas More as enjoying a perfect social, legal, and political system.”という定義がなされている。<sup>2</sup> 〈ユートピア〉という概念を考えると、やはり、モアの描いた島の名としてのユートピア島、あるいは、より一般的には、彼の作品としての『ユートピア』*Utopia* が最初に挙げられねばならない。GT との比較の上でもモアの作品を無視することはできない。次に転義として“Any imaginary, indefinitely- remote region, country, or locality.”となっている。「想像上の」「imaginary」及び「遠隔の」「remote」という 2 点は、〈ユートピア〉の形容として決して外せない条項である。GT もこれを満たす。但し、この説明はユートピアの外面的特徴の一つを表したものであるに過ぎないので、定義上の必要条件ではあっても十分条件とは言えない。

---

2. “Utopia,” *OED*, 2nd ed. (1989).

次に2として、“A place, state, or condition ideally perfect in respect of politics, laws, customs, and conditions.”前項が外的特徴の最重要点であるのに対応して、この項は、内容面での不可欠要因、“ideally perfect”すなわち完全性、理想性という事項を表す。この項は、モアの『ユートピア』から離れた、総称的な、〈ユートピア〉という概念として通用しているものの、最も単純で明快な表現であるだろう。従って、個々の事例としてのモアの『ユートピア』で描かれた社会がこれに当てはまるかどうか、という議論も、当然起こり得る余地が存する。GTも含む、他の諸々の同趣向の作品に関しても、この条件を満たすかどうかという問いは成立するであろう。OEDは、最後に2bとして、“An impossibly ideal scheme, esp. for social improvement.”を挙げている。理想的なものの極端な例は、「不可能である」という判断に直接的に結び付けられる。一般に、何らかの事象なり計画なりを指して「ユートピア的だ」と言う場合、我々の念頭にある意味はこの項に表されたものである。

以上、問題点を指摘しながら、〈ユートピア〉の辞書的な意味を追って来た。その結果、得られたものは、いかにも少ないことには、失望する程であるものの、辞書の定義とは、この様に、誰もが納得するようなものであり、またそうでなければならないことを考えれば、我々としてはこれを、そこから更に問題の核心へと踏みこんでいく契機とする他はない。とりあえずいくつかの基本的な事項を挙げておこう。まず第1点として、我々は、以下においてこの問題を取り扱う場合、モアの『ユートピア』と、一般的な概念としての〈ユートピア〉とを混同してはならないという、基本的な点を確認しておきたい。第2に、モアの“Utopia”という造語が、元来「どこにも無い場所」“outopos” (not place)を表すと同時に、「良い場所」“eutopos”であるという含みもあったということが、改めて想起されるということ。前者は“imaginary”に、後者は“perfect”や“ideal”という語に置き換えることが出来る、と考えられるからである。そして第3に、どの項にも、社会、政治、法律といった語が表れていることから推測されるように、〈ユートピア〉はこういった対象、すなわち社会制度全般を度外視しては考えられない性質のものである、ということ。以上で〈ユートピア〉という語自体についての考察はひとまずおき、次にGTという作品に即して、その中のユートピア的要素について考えていくこととする。

## II

GT においてガリヴァが訪れる主要な国は計10か国程（リリパット、ブレフスキュ、プロブディングナグ、ラピュタ、バルニバルビ、クラブダブドリブ、ラグナグ、日本、フィンム国）であるが、これらは全てヨーロッパからみて「遠隔の」地にあるだけでなく、日本以外は全て「想像上の」国であるという点で、GT を<ユートピア>を扱った作品であると見做すための、外的な必要条件は2つとも満たされることになる。とりわけ、想像上の国であるということが、作品中では明示されず、あたかも実在の国であるかのようにこれらの場所は描かれているということは、本作品の大きな特色の一つである。具体的に述べれば、作品の出版当時流行を見ていた旅行記の形態を取っていることや、ガリヴァにはダンピア William Dampier やモル Herman Moll との親類関係や知人関係があることが記されているということなど、様々な仕掛けが施されており、これらが、虚構と現実の境界を曖昧にする役割を負っているのである。後者の件については、スウィフトは、モアのヒスロディー Hythloday がヴェスプッチ Vespucci と航海を共にしたことを先例としている。ヒスロディーは次のように紹介されている。「自分は世界の隅々を見たいという欲望にかられ、飄然としてアメリゴ・ヴェスプッチの一行に参加されました。」“[F]or the desire that he had to see and know the far countries of the world, he joined himself in company with Amerigo Vespucci . . .”<sup>3</sup> GT では、更に、真実らしい地図がテキストに添えられることによっても、実在を保証された形となっている国々の状態が、ガリヴァ船長の実体験の記録として叙述されているのである。この点において、スウィフトは、モアの手法を越えている。モアのユートピア島の所在は、結局不明確なままであるばかりか、島自体や都市や河川などの、ギリシャ語から作られた名称が、既にその非実在性を示唆するものであった。例えば、アモーロート市 Amaurote は「暗い都市」、アナイダ河 Anyder は「水なき河」、アデモス Adamus は「人民を持たざる者」を意味するというように。<sup>4</sup> これに対し、GT においては、地名だけでなく人名その他をも含め、名辞のほとんどが、単純な解釈の出来るものとはなっていないのである。読み手が各人の

3. Thomas More, *Utopia*, Everyman's Library (London: J. M. Dent and Sons, 1991), p.15. トマス・モア、平井正穂訳、『ユートピア』（東京：岩波書店、1957）、11頁。

4. *Utopia*, p.57, 59, 67. 『ユートピア』、72、75、86頁。

語感覚に従って自由に解釈をする余地があるという点は、特筆すべきことである。その中におかれた「日本」や「江戸」という我々に馴染みのある固有名詞に接するときも、これらを全く違和感なくガリヴァの旅程の一部として認めてしまうことは、大変容易なことではないだろうか。現実の世界と非現実の世界とを対等な関係の下に併置して、表面上は何の説明も加えず、読者の読み解く自由を制約しないという点は、この作品の持つ魅力の一つである。

元来、旅行記の中で描かれるものは、新奇なもの、珍妙なもの、怪異なもの等である以上、著者が更にそれらに潤色を加えようという誘惑に駆られれば、その結果は、たとえ真正の旅行記といえども、事実の報告を離れ、虚構に近付いていくことであろう。そうした傾向を顕著に示す旅行記の存在と密接な関わりを持つ *GT* は、現実性を装いつつも、徹底して虚構性を追求している作品である。この作品は、ダンピアなどの真正の旅行記に対して、〈擬似旅行記〉 *mock-traveller's tale* なのである。外的な形式、即ち書物としての形態が、真正な旅行記を模しているということが、内実の虚構性を際立たせる結果となっているという図式が成り立つ。この虚構性に着目した場合、*GT* は、ルキアーノスを始祖とする〈想像上の旅〉 *imaginary voyage* の伝統に属す作品であるとも見做せることになる。*GT* は、ユートピアを描こうとする際に必要な条件を形式的に十分に備えているだけでなく、なお、独自の特色を持っているということが出来る。

では、作品の内実はどうであろうか。*OED* の定義2の「理想的に完全」な社会を描いたものかと言えば、一読して分かるように、決してこのこと自体を目的とするものではない。全編をおおい尽くすのは「人類は生得的にきわめて悪であり、しかも社会がその人間をひどくする」<sup>5</sup> という、悲観的な、人類そのものに対する憎悪、嫌悪である、とさえ言い得る程である。しかしながら、こうした見解は、例えばヤフーの醜悪さだけに着目し、作品を過度に単純に解釈した、一面的かつ表面的な見方でもある。確かに、この様な見方に基づいてスウィフトを反ユートピアのプリンスに仕立て上げる傾向は、近年の流行の一つとなっているが、我々としては、性急に結論を述べる前に、ここで、作中に散見される、最も基本的な意味でのユートピア的要素を抽出しておくのも無駄ではないだろう。

先に指摘したとおり、ユートピア的なるものは、社会、政治、法律において、即ち「制度」として表されることが通例である。この場合の「制度」には、こ

---

5. ジル・ラプージュ、『ユートピアと文明』（東京：紀伊國屋書店、1988）、229頁。

れら以外に、広く、社会の慣習、経済活動、個人や家庭の生活などが当然含まれるものである。こう考えれば、ユートピア文学として一括され得るこの種の作品で扱われる問題の範囲は、人間の「生」全体に及ぶであろう。GTの中に「理想的な制度」を探しだそうという観点から見れば、例えば、リリパットの「本来の制度」“the original Institutions”<sup>6</sup>の中にはそれらしきものが含まれている。すなわち、リリパットの学問は、「あらゆる分野において過去長い年月にわたって栄えてきたものなのだ。」“for many Ages hath flourished in all its Branches among them.”「信賞必罰こそ政治運営のかなめだ、などとわれわれはよく言うが、リリパット以外のどこかの国でこの公理が実際に実施されているのを、残念ながら私は見たことがない。」“Although we usually call Reward and Punishment, the two Hinges upon which all Government turns; yet I could never observe this Maxim to be put in Practice by any Nation, except that of *Lilliput*.”「あらゆる就職の場合、その人選に当たっては、有能な人間であることよりも有徳の士であることを重視する。」“In chusing Persons for all Employments, they have more Regard to good Morals than to great Abilities.”<sup>7</sup> 以上のような諸点は、複雑な価値判断を必要とする事柄ではないだけに、我々を含む多くの読者にとって、十分「理想的な制度」であるように見えるものである。

これらに対し、同時に扱われた、親と子の関係や、教育についての事情の紹介の部分については、果たしてこれは一義的に理想的なものであると認められるものであるか否か、という議論の余地は、多分に存する。事実、これは容易に判断のつく事柄ではない。だが、少なくとも、学校教育という「制度」を扱っているという事実、及びその扱われ方の形態における、ある一つの特徴を以て、作品のこの部分全体をまとめて、ユートピア的である、と規定することは可能である。第1篇においては、以上のような「制度」に関わる叙述は、ガリヴァの報告という形で為され、他の部分とは異なるニュアンスで書かれている。「この帝国のことは、別に一つの論文 (“a particular Treatise”) としてまとめて書くことにしている」とガリヴァは述べる。<sup>8</sup> これは、その、結局、我々の目に触れることの無かった「論文」の素描だというのである。Jenny Mezciems の

6. GT, I, vi; p.60. スウィフト、平井正穂訳、『ガリヴァ旅行記』（東京：岩波書店、1980）、70頁。

7. GT, I, vi; p.57, p.59. 『ガリヴァ旅行記』、66、68、69頁。

8. GT, I, vi; p.57. 『ガリヴァ旅行記』、66頁。

言うように、ガリヴァはある意味で哲学者をよそおっているのである。<sup>9</sup> つまり、彼は、国家の支配者と親しく会見し、助言を与えるだけでなく、その内容を読者に「論文」の形で報告することも出来る人物であるのだ。ここで、〈ユートピア〉の提示の方法としては、物語よりはむしろ論文という形態が一般的であったという歴史的事実が思い起こされる。あるいは、文学と社会科学の領域が未分化であった、スウィフト以前のユートピア作品においては、物語と論文の区別が為されないまま、両者が個々の作品に取り入れられているという見方も出来るであろう。GTにおいても事情は本質的には変化していないとすれば、この作品はユートピア文学との親近性を保持していると言えるであろう。冒頭でこの作品を「怪物的」と述べたのはこうした点をも踏まえてのことである。

ところで、リリパット渡航記の中で、一種の「論文」として述べられた、彼らリリパット人の制度は、スウィフトにとっての理想であったのだろうか。実際、彼らの「制度」自体は、その前後の物語の部分における、背徳性のあらわな行為の数々とは、いかにもそぐわないものである。優れた点のある「本来の制度」が、文字どおり卑小なリリパット人のものである、という明白な矛盾を作者スウィフトが敢えて取りのぞいてはいないという事実から、却って、それがスウィフト自身の理想の反映であったことが窺われるのである。仮に、そうでなかったにせよ、これらの「制度」を扱った箇所は、「論文」的であるという、叙述の形態面において、また、何らかの基準に基づいた、理想的状態を述べたものであろう、という印象を読み手に与えるという意味において、ユートピア的な文学の特徴の一端を示すものなのである。

同様の「論文」は、第2渡航記にも見出すことが出来る。GTの前半の2篇は、ガリヴァ自身の体験の記録が物語の興味の中心部分を形成するが、その語りの中において「この国の人々の学問は、大変不十分なもので云々」(“The Learnings of this People is very defective . . .”)と彼が説明し始めるや否や、第7章の後半は、プロブディングナグの国制の紹介へと移行する。<sup>10</sup> そして、これが、その前の第6章から第7章にかけてでの、ガリヴァの口を通して国王に対して述べられた英国やヨーロッパの諸制度についての言葉と対比される、と

9. Jenny Mezciems, “The Unity of Swift’s ‘Voyage to Laputa’: Structure As Meaning in Utopian Fiction,” *The Modern Language Review*, 72 (January 1977), 15.

10. GT, II, vii; p.136. 『ガリヴァー旅行記』、186頁参照。



いう構図になっている。王との謁見でのガリヴァの態度が、一貫して祖国を賛美しようとするものであり、逆に作者スウィフトの意図は、アイロニーの手法により、一貫して、卑小なガリヴァの言辞の内容の卑小さを強調しようとするものであるため、この箇所への諷刺としての構造は、大変理解しやすいものとなっている。ヨーロッパの現実諷刺の辛辣さは、特に、火薬、軍事の面をテーマとするときに一層際立つ。列挙方によって述べたてられる破壊的な兵器の威力は、18世紀当時のテクノロジーの粋が結集されたかのような印象を読む者に与えるだけでなく、それによってもたらされる死の悲惨さに対する感覚の麻痺を通り越して、一種の爽快感をすら感じさせるまでに至っている。反道徳的なニュアンスは諷刺の持つ力の一つの極限を示している、とさえ言い得るものである。プロブディングナグの軍隊について述べた部分においても、「稲妻の閃き」“Flashes of Lightning”<sup>11</sup> という語句に示されるように、勇壮さと悲惨さとは表裏一体のものとして示される。科学技術の悪用としての軍事力に代表される様々な悪習が誇張されて語られるヨーロッパ社会を、ネガとしての<逆ユートピア>であるとすれば、プロブディングナグは、ネガのネガ、すなわちポジとして<ユートピア>の要素を備えた場所である、と考えることが出来る。

彼らの国制は、実に単純なものである。道徳、歴史、詩、数学の、わずか4種の学問、彼らのアルファベットの数と同じ22語か、それ以下で書かれた法律、明晰で男性的で流暢だが派手さの無い文体、といったようなものによって代表される、単純な文化を持つ単純な国民性が、プロブディングナグの特徴である。そして、何より重要なのは、この単純さが美点として提示されていることである。一方、リリパットは、優れた制度を持っていながら、それが、現実には既に腐敗堕落してしまっているという点で、また、現実の英国やヨーロッパの状態をグロテスクに誇張して描きだしたという点で、総合的に考えた場合、ユートピアというよりはむしろ逆ユートピア的な性格を、より顕著に示していることになる。

### III

我々は、今、<逆ユートピア>という語を用いた。それはいかなるものであるかを、ここで明確にしておかねばならない。<逆ユートピア>は、“anti-Utopia”

11. GT, II, vii; p.138. 『ガリヴァ旅行記』、189頁参照。

あるいは“dystopia”の謂であって、あるべからざる、理想的でない、悪い場所のヴィジョンを呈示することを主たる目的とする、ということとその第一の特徴とするものである。〈ユートピア〉が理想主義、楽天主義にもとづいて、合理性、秩序と調和を人類の幸福の条件として信じる態度の表明であるとするれば、〈逆ユートピア〉は、反理想主義的で悲観的な人間観に依拠している。非合理的で、無秩序と不調和とに彩られた社会体制の呈示を目的とするものである場合もあれば、あまりにも合理的で秩序正しい社会体制こそが不気味で、まがまがしいものであるという信条を展開したものである場合もある。再び、*OED* によれば“An imaginary place or condition in which everything is as bad as possible”ということである。<sup>12</sup> すなわち、〈逆ユートピア〉とは、〈ユートピア〉とは、まさに逆の性格を備えた亜種、あるいは派生種である、と仮に規定しておく。

今世紀にはユートピア文学の比重は、大きくディストピアへと傾いているのは周知の事実である。現代の〈逆ユートピア〉の代表的な例として、オーウェル Orwell の『1984』*Nineteen Eighty-Four*、ハックスリー Huxley の『すばらしい新世界』*Brave New World*、ザミャーチン Y. I. Zamyatin の『われら』*We*、を挙げる事が出来る。これらは、いずれも、将来の社会体制に関する暗い予測に基づいて、現体制を批判したり、情報管理社会や物質文明社会における非人間性を告発したりする意図の下に、現代文明に潜在する恐怖を描きだしているものである。提示されている社会体制によって喚起されるものは、作者とほとんど同時代に生きる我々読者全てにとって等しい意味を持つ。その意味で、これらは、作品の成立の時点から〈逆ユートピア〉として我々の前に存在しているものである。他方、作品の解釈の時点で成立すると言えようなく逆ユートピアもまた存在し得ることに、ここで注意せねばならない。過去において、本来、作者の意図としては理想的なくユートピアとして描かれたものであっても、現代の我々にとっては、〈逆ユートピア〉以外の何ものでもない、と思われるものが存在する。理想的でないユートピアなるものの発生という逆説的な事態が起り得るのである。〈ユートピア〉は通時的に変化を被らずにはいない。これは、社会的な規範、個々人の価値判断の基準といったものが可変的なものであるが故の、不可避的な事態であるのは言うまでもない。また、問題を共時的にとらえた場合も事情は同じである。体制が多少なりとも異なる社会に属す作者と読者との間の了解には差異が存在するのは自明であるが、仮

---

12. “dystopia,” *OED*, 2nd ed. (1989).

に両者が同一の社会の成員であって、同じ時代に生きている者どうしであっても、思想、信条や立場の差は、完全には解消され得ないものであるだろう。実際のところ、<ユートピア>は<逆ユートピア>へときわめて容易に反転してしまう。そうである以上、ある対象が<ユートピア>であるか<逆ユートピア>であるかの我々の判断は、恣意的なものとならざるを得ない。

このことについての例は、GT においても枚挙にいとまがない。先に、ユートピア的である、と規定したプロブディングナグにしても、学問が、道徳、歴史、詩、数学の4学科のみからなるという点については、他の学問分野の研究者ならば、これはあまり理想的な国であるとは見做しそうにない。またもっと微妙な問題も実は第2渡航記には指摘されるのである。それは、プロブディングナグ国王の、次の言葉である。

He said, he knew no Reason, why those who entertain Opinions prejudicial to the Publick, should be obliged to change, or should not be obliged to conceal them. And, as it was Tyranny in any Government to require the first, so it was Weakness not to enforce the second: For, a Man may be allowed to keep Poisons in his Closet, but not to vend them about as Cordials.<sup>13</sup>

我々の大衆民主主義の価値観の基準から考えて、前半の見解、すなわち個人の意見を変えることを国家が強制することの不可という点は、比較的納得のいきやすいものであるのに対し、後半の、言論、表現の自由の圧殺とも受けとれる言葉は、読み手の評価に大きな差異の生じる点であろう。一体、国王の言葉はスウィフトの本心であるのかないのか。もしスウィフトの意図通りのものであるとするなら、これは彼の思考に限界のあることの証左であるのか。それは時代的な制約によるものか、あるいは彼個人の非民主的な傾向によるのか。引用の一節を取り上げただけで、かくも解決の容易でない疑問が生じてくる。プロブディングナグといえども、ある特定の価値判断の尺度を当てはめれば、いとも容易に逆ユートピア的な様相を呈示し始めることを再確認しておきたい。

<ユートピア>と<逆ユートピア>の反転という現象は、当然起こるべくして起こるものであって、一義的な<ユートピア>、一義的な<逆ユートピア>は存在しないのではないだろうか。仮にそうであれば、あるのは便宜的な分類

13. GT, II, vi; p.131. 『ガリヴァ旅行記』、179頁参照。

のみであるといっても過言でないだろう。むしろ、この双方を可逆的に往還する、とらえどころの無い世界像の呈示こそ、ユートピア文学の本質なのではないだろうか。先程、我々は、〈逆ユートピア〉を〈ユートピア〉の派生種であると規定したが、この両者は一枚のコインの両面のようなものであるとも言えるだろう。従って、*GT*のように、ユートピア文学の系譜に属していて、ユートピア的な要素を備えていながらも、単に〈ユートピア〉の呈示を目的とするのではなく、場合によっては、〈ユートピア〉の概念そのものを嘲笑するかのとき様相をも呈した、複雑な意図と手法で形づくられた作品においては、そこで描きだされた個々の「制度」に対する解釈の可逆性は、ほとんど我々の把握力を越えたものであるとしても、何の不思議もない。そのような事情を熟知した上で、スウィフトが敢えて作中に「制度」の紹介を挿入しているとしたら、*GT*は〈ユートピア〉乃至〈逆ユートピア〉とは似て非なる〈擬似ユートピア〉である、と言って良いのではなかろうか。ここに、我々は、本作品の見方、捉え方の可能性の一つとして、この作品は〈ユートピア／逆ユートピア〉のパロディーとしての〈擬似ユートピア〉である、と考える視点を提出したい。

#### IV

以上のような特質を持つ作品である *GT* は、確かに画一的な解釈を受け入れるものではない。しかしながら、本作品が、全く我々の理解を越えたものであるということではない。作品の本質に迫るには、テキストの虚心な読み、先行する作品の及ぼした影響、作者スウィフトの人物的な考察などの、総合的な考究が何よりも必要であるだろう。先の、「言論の自由」の問題を再び例にとって、この間の事情を更に考察してみたい。まず我々は、約200年前の、モアの『ユートピア』でも同様のテーマが語られていることに気付かねばならない。モアはスウィフトとは異なり、宗教的な問題を作中で正面から取り上げている。『ユートピア』第2巻の「ユートピア人の諸宗教について」“Of the Religions in Utopia”の中で、信教の自由の保証と並んで、宗教活動において「他人を改宗させようとしてがむしゃらに猛進する者は追放か奴隷刑に処せられる」(“To him that would vehemently and fervently in this cause strive and contend was decreed banishment or bondage.”)ことが明記されている。この裏付けとなるものとして「必ずや真理はやがて、白日の下に燦然と輝き出であろう」(“the truth of its own power would at the last issue out and come to light.”)とい

う考え方が述べられている。ユートピア国において真ならざるものの代表である無神論者は、人間扱いされず、刑罰すら与えられない。そして彼らは公の場で自分の意見を論じるのを禁じられている。だが、その代わりに、司祭と論争することは許されている、というのである。<sup>14</sup>

この様に『ユートピア』においては、全体的に見れば理にかなっているとも思われる宗教制度が、かなり詳細に論じられている。これと、*GT*における、かなり素朴な、毒薬と強心剤の比喩とを対比すると、この問題全体に対する、モアとスウィフトの両者の取り組みの態度における真剣味の差の大きさが、如実に浮かび上がって来るようである。逆に言えば、スウィフトはモアのようにこの問題に深入りするのを避けているのである。また、前者においては、問題は、「宗教的な信条」から「国家に対する意見」へと変更されていることは、従来言われているように、スウィフトはキリスト教的な問題を出来るだけ避けたのである、という見方を支持する一つの事例であるとも言えよう。但し、公職上、英国国教を奉ずる者として彼は、この問題を別のところで述べているということに注意せねばならない。“Thoughts on Religion”で、“Every man, as a member of the commonwealth, ought to be content with the possession of his own opinion in private, without perplexing his neighbour or disturbing the public”と述べ、<sup>15</sup> スウィフト自身、プロブディングナグ国王と意見の一致をみているのである。国王の言葉に関してスウィフトは、ガリヴァに何の批評も加えさせていない。このことから、この件は、彼の意見の率直な表明であったと見做すことが適当であると考えて良いのではないだろうか。但し、真理に内在する力がいつかは発揮されるという、いかにも最も素朴な種類のユートピストたちの好みそうな、モアに見られた理念は、スウィフトにおいてはその存在さえ定かではなく、仮に存在するとしても、恐らく、より複雑なものとなっているであろうことは、想像に難くない。

以上のように考察してみると、モアからスウィフトへの影響は確かに存在しているようだが、モアの『ユートピア』をも含む<ユートピア/逆ユートピア>の作品をパロディー化することを通じて成立した、<擬似ユートピア>の作品である *GT* では、「制度」が扱われる全ての場合において、真剣な取り組みが為されるとは限らない。国王の言葉のように、目立たない形で、さり気なく重大

14. *Utopia*, pp.119-21. 『ユートピア』、161-63頁。

15. Swift, “Thoughts on Religion,” in *Irish Tracts and Sermons*, ed. Herbert Davis, Vol. IX of *The Prose Writings of Jonathan Swift*, p.261.

な問題が提起されることも有り得るのである。そしてそれが、決して無視できるものでない、というところに、GTに含まれる様々な要素を解釈する際の難しさが存するのではないだろうか。

我々は、これまで、「言論の自由」、「信教の自由」という、極めて社会的、政治的な問題を扱って来たが、更にこの点について、フィヌム国の状況に目を向けて考察してみたい。周知のようにフィヌム国は、馬たちに関しては、彼らは、何事も理性に従うということを経科玉条にしているのに対し、ヤフーたちはと言えば、本性上備わった悪徳と欲望の原理に従って生きている、という、この上ない清潔さと、この上ない醜悪さとが、対照的に描きだされた世界である。フィヌムとヤフーが別々の国を成すのではなく、両者が共存しているという点にこそ、私見によれば、この国の異様さ、不気味さ、(あるいは違う見方では、面白さ)の本質がある。このことは、フィヌムの全国会議の、ほとんど唯一の議題がヤフー問題である、ということに、集約的に表されている。フィヌムにとっての理性は絶対的なものなので、それに従っている限り「間違っただけ、乃至は疑わしい、命題について、論争したり喧嘩したり討論したり主張したりすること自体、フィヌムの知らぬ悪」である(“So that Controversies, Wranglings, Disputes, and Positiveness in false or dubious Propositions, are Evils unknown among the Houyhnhnms.”)<sup>16</sup> という、実に極端なまでにきれいさっぱりと「言論」の存在そのものが否定されているというところまで、彼らの世界は行き着いてしまっているのである。更に、先に問題とした、国家による強制の件も、より極端な形でフィヌムの国制の中に見出だすことが出来る。理性的動物ともあろうものが、何かに強制されるということとはあり得ない。ただ、忠告ないし「勧告」だけが考えられる、というのである。アルコン Paul K. Alkon は、“The fourth voyage is a variety of utopia”<sup>17</sup>と述べているが、もはやこれを<ユートピア>の変種であると言うだけでは十分でない。それどころか、これを<逆ユートピア>の典型である、と見るだけでも不十分であろう。まさにユートピア的な「制度」の行き着く先の極致を示すとともに、<ユートピア/逆ユートピア>を描こうとする気質を持った人間とその作品とを一挙に嘲笑するかなのようなスウィフトの馬たちの不気味な眼差し、一点の曇りのない澄み切

16. GT, IV, viii; p.267. 『ガリヴァー旅行記』、380頁参照。

17. Paul K. Alkon, “Gulliver and the Origins of Science Fiction,” in *The Genres of Gulliver's Travels*, ed. Frederik N. Smith (Newark: U. of Delaware Press, 1990), p.174.

った目の中の死の光は、読む者をして戦慄せしめずにはおかない。この世界はユートピア的か、逆ユートピア的か、という議論そのものが、フィヌム国に関しては無効となる程ではないだろうか。

さて、フィヌムの主人が受けた「勧告」とは、ガリヴァを他のヤフー同様こき使うか、泳いで祖国に帰らせるかの、いずれかの手段を取るように、というものであった。ガリヴァは、不承不承、船を作り始める。それと同時に第4渡航記は、ほとんど狂気の様相を呈し始めるのである。それは、追放当時の状況の下にある〈登場人物としてのガリヴァ〉と、それを叙述する旅行記の〈書き手としてのガリヴァ〉とが、ともに正常な状態から逸脱してしまっていることと関わりがある。彼はヤフーの皮を船にはり、ヤフーの脂肪を隙間に詰め込むという行動をとる。さらに、その行為を彼は平然と記述していく。読者によっては、ガリヴァのカニバリズムの可能性さえ、この箇所からは読み取ることが出来るだろう。英国には帰ったものの、家族の悪臭に辟易し、常の居場所は2頭の退化したフィヌムと語らう厩舎であるという、滑稽なまでに異常な姿に変貌したガリヴァ。我々はいま一度GTの全体を、フィヌムの「理性」による薫陶の結果として、逆に、滑稽な姿をさらすことになった、人類＝ヤフーの嫌悪者であるガリヴァが執筆したという、この書物全体の設定を再考してみるべきではないだろうか。

確かに、物語を第1篇から順に読み進んでいく限りにおいて、このような人物が書いたものであるという設定は、明瞭に感知されるものではない。第1篇や第3篇のある箇所には、人類の嫌悪者と化した後のガリヴァの筆によるものであると言えるような点がないわけではないが、全体として、〈語り手としてのガリヴァ〉は、〈登場人物としてのガリヴァ〉が素朴な船員であればそのように、ヨーロッパの制度の愚かな賛美者であればそのように、邪悪な陰謀の推奨者であればまたそのように、執筆しているように見える。従って、この本は狂人ガリヴァが書いたものであるのだ、という思いは、全編を通読した後になつてのみ得られる、漠然とした印象にすぎないものではあるだろう。しかし、この印象をあくまで保持することは、自分は一匹のヤフーなり、と自ら認めたガリヴァの最後の境遇と、それを自分自身で記述する態度とが、よく一致していて、それがあまりにも愚かしいものであるが故に、我々の読解の方向性として非常に魅力的なものの一つであることは事実であると言える。人類の公益のために、と頼まれ、不本意ながら旅行記の出版を承諾したのは、ヤフー性の再発現による気の迷いであった。ヤフー族の矯正などという馬鹿げた計画、幻を追うような計画とは永久におさらばしようと思う、という言葉で結ばれる「ガリ

ヴァからシンプソンへの書簡」を更に続けて読めば、*GT* そのものが、単なる<ユートピア>ないし<逆ユートピア>の呈示を目的としたものでないことははっきりする。

I must freely confess, that since my last Return, some corruptions of my *Yahoo* Nature have revived in me by Conversing with a few of your Species, and particularly those of mine own Family, by an unavoidable Necessity; else I should never have attempted so absurd a Project as that of reforming the *Yahoo* Race in this Kingdom; but, I have now done with all such visionary Schemes for ever.<sup>18</sup>

「理想」も「現実」も、結局はともに投げ捨てられてしまったかのような印象を読み手に持たせる結末を、スウィフトは巧妙に案出していると言えるのではないだろうか。ここで我々は、*OED* の語釈の最後のもの、“An impossibly ideal scheme, especially for social improvement”を思い出さずにはいられない。この点でこそ *GT* は、「言論の自由」を最大限に行使し、自ら信奉する、言わば「フイヌム教」とでも称すべきものに基づいて、執筆、出版したガリヴァにとって、まさに<ユートピア>であったのである。

## 結 び

*GT* には、その構成要素としてユートピア的、ないしは逆ユートピア的なものが存在していると言っても、誤りではない。だが、作品全体の成り立ちの面からは、それらは、諷刺の遂行というスウィフトの意図の、言わば副次的な位置にあるものではなかろうか。結局、この作品は、<ユートピア>や<逆ユートピア>とは似て非なる、<擬似ユートピア>の様相をより顕著に呈するものであって、錯綜した世界像を、結果として表現することになった、極めて特異な成り立ちの作品である、と言う他はない。そうした特殊な性格を持つ作品の締めくくりとして、作者は、ガリヴァの著述の最後に、まるで取って付けたかのように“pride”の問題を持ち出させている。“pride”は七つの大罪の最たるもの

18. *GT*, p.8. 『ガリヴァー旅行記』、433頁参照。



であって、モアの『ユートピア』でも折りにふれて取り上げられたものであるが、よく考えてみれば、何らかの理想的な社会、制度を提示しようというユートピストの元来の意図こそ、この“pride”に毒されたものはないのではないか。この点については稿を改めて考察せねばならないが、こうしたことをもスウィフトは意識していたように思えてならないのである。